

P1-048

経口栄養剤の使用を契機に低栄養からの改善と固形食の摂取が可能となった症例

稲垣 智子¹、入江 泰子¹、園府寺 美²、
木野 稔²

¹社会医療法人真美会中野こども病院 栄養科、

²社会医療法人真美会中野こども病院

【はじめに】

当院は小児内科専門の急性期病院であるが、心身両面からの医療に取り組んでいる。入院時に食生活に何らかの問題があると思われる患者は、栄養士が食事摂取量や内容を確認し、看護師・保育士・心理士と協力し、チームとして食生活の改善に取り組んでいる。今回は、離乳食への移行が円滑にいかず固形食の摂取不良から低栄養となり入院した3症例への関わりについて報告する。

【症例1】

1歳1か月男児。介入期間は2か月で、うち入院が26日間であった。入院時体重8.7kg(-1SD)で、授乳回数が多く離乳食が進んでいなかったが食パンは食べることもあった。心理士の見立てから刺激に敏感で視覚的なこだわりが強いことがわかり、毎食パンを提供して摂取を促した。補助的に経口栄養剤を2週間使用し、退院までには年齢相応食も完食できるようになった。1歳3か月時には体重10.1kg(標準)に復していた。

【症例2】

1歳1か月男児。介入期間は4か月で、うち入院が43日間であった。入院時の体重は8.4kg(-1.5SD)でHb9.3g/dlと貧血も認められた。母乳栄養で離乳食が進んでおらず、昼食時の観察を重ね、与え方や調理法などを指導した。断乳して経口栄養剤を8日間使用してからは経口摂取量が増え、食事以外に菓子も積極的に食べるようになった。1歳5か月時には体重10.4kg(標準)に復した。

【症例3】

1歳9か月男児。介入期間は7.5か月で、うち入院が43日間であった。入院時体重8.3kg(-3SD)でHb7.9g/dlと貧血も認められた。離乳食が進まないまま断乳を強行したところ一切飲食を受け付けなくなり、湯船の湯を飲むようになり入院した。自閉傾向が強いため、食事は介助者が食べて見せられるように2膳準備し、おやつは固定したものを提供した。経口栄養剤は7か月間使用した。2歳4か月時には体重10.8kg(-1.5SD)に回復し、芋ケンピやおにぎりなどが摂取できるようになった。

【考察・まとめ】

摂食不良のベースには児の発達の偏りやこだわりの強さなどが影響する場合もあるが、栄養剤を使用して低栄養を改善したことで本来の児の活動性を引出すことができた。また、入院中に栄養改善の指導だけでなく、保育士や心理士が寄り添うことで養育者に安心と自信を持ってもらえた。その結果、児の現状に合った食事形態と摂取方法を確立することができ、退院後も継続することにつながった。

P1-049

摂食障害のある女子高校生のQOLを高める心理相談支援の一事例

成田 泉¹、島田 明子¹、水内 豊和²

¹富山大学大学院 人間発達科学研究科、

²富山大学 人間発達科学部

【目的】

本研究では、摂食障害のある女子高校生を対象に、年齢相応の女子高校生があたりまえに関心を持つような「トコロ、コト、モノ」を世代が近い女子大学院生と共有体験することを通して、余暇を広げたり、自己実現に向けた目標を見つけたりすることを目的として行った心理相談支援の一事例について報告する。

【方法】

対象は摂食障害ANの高校2年生の女子生徒である。体重増加を極度に恐れ、食行動への抵抗感が強い。1日の総摂取カロリーは180kcalで、最低体重は26kgであった。お菓子作りが好きだが、人が食べるのを見て喜ぶことはあっても自分が食べることはない。同世代の女子高校生と比較して一人及び複数人での自由な時間の過ごし方のバリエーションが少ない。また、中学時代の入院期間の影響から、年齢相応に期待される社会常識や生活経験が著しく乏しい。母子共依存にあるため、心理職である第三筆者が母親のカウンセリング、並行して対象者と世代に近い大学院生である第一・二筆者が(1)1・2回/月の活動(主に調理活動)、(2)随時LINEグループによるオンラインのコミュニケーション支援、そして(3)そこから企画・実行する毎月の女子会(ショッピングやカフェ巡り)という3つのアプローチを18ヶ月間行った。

【結果】

休みがちであった学校に毎日通うようになった。学校以外の時間における生活範囲・行動範囲が広がり、母親以外の人や一人での行動が増えた。また「アルバイトをしてみたい」という強い希望も持つようになった。将来についての選択肢も広がり、以前は漠然と「パティシエ」という夢を語っていたが、現在は大学への進学に興味をもち行動している。大学院生との調理活動を通して、カロリー以外にも栄養や、運動量、睡眠時間といった自分の身体にも目を向けるようになり、結果的に食量が増えた。さらに、作りたいメニューや行きたい店を自分から提案するようになった。母親からはスマホを見ながら寝落ちする様子を「人間らしくなった」と喜ぶ声もきかれた。なお親子関係検査FDTならびに母親の精神健康度GHQも改善した。

【考察】

年齢相応の姿にはほど遠いものの、女子高生が持つ理想自己と現実自己の双方をバランスよく高め、QOLの向上に資することができたと考える。当方は医療機関ではないため食べることを直接的なゴールにするのではなく、ほぼ同世代の専門性のある大学院生との共有体験を通じた支援の有効性が示唆された。